

小児がん患児のきょうだいに対する情報提供の内容と きょうだいの認識, 心的外傷後ストレス症状との関連

The relationships among the contents of information provided for the siblings of pediatric cancer patients, their recognition of the information, and their Post-traumatic Stress Symptoms

長谷川 由美 (Yumi Hasegawa) 指導: 鈴木 伸一

1. 問題と目的

小児がんの家族研究の中で, 小児がん患児のきょうだい(以下, きょうだい)に焦点があてられるようになり, きょうだいの心理社会的支援の必要性が提唱されている。1999年に, 国際小児がん学会が作成したきょうだい支援のガイドライン中には, きょうだいへの説明の必要性について記されている。しかし, 小児がん患児(以下, 患児)の病気について説明することできょうだいの不安が高まるという結果もあり, 適切な説明の方法については明らかになっていない(古溝, 2012)。また, きょうだいの疾患理解の定義を定め, きょうだいに欠けている情報を明らかにする必要があるが(北村他, 2000), きょうだいの理解度を確かめる方法は確立されていないのが現状である。

本研究では, きょうだいにどのように情報提供がおこなわれ, きょうだいはどのように情報を認識しているのかを明らかにする。また, その後のきょうだいの適応にとって望ましいきょうだいへの情報提供の方法と, きょうだいのがんに対する認識を明らかにする。本研究により, 望ましい情報提供の方法やきょうだいの認識が明確になることで, きょうだいの理解度を確かめながら, サポートを行うことの一助となると考えられる。

2. 方法

調査対象者と手続き

都内私立総合病院へ入院経験があり, 治療またはフォローアップのために外来受診中の患児の保護者20名(母親18名, 父親2名), きょうだい21名に質問紙調査を実施した。

調査材料

【保護者】患児が入院中に, きょうだいに提供した情報に関して, 内容, 情報提供時期, 情報提供者, 情報提供時のきょうだいの様子とその後のきょうだいの変化について自由記述で回答を求めた。

【患児のきょうだい】①情報の認識: 患児が入院中にきょうだいが認識していた情報について自由記述で回答を求めた。②Post-traumatic Stress Symptom (PTSS): 16歳未満には, Posttraumatic Stress Disorder Reaction Index (PTSD-RI) 日本語版, 16歳以上には, Impact of Events Scale revised (IES-R) 日本語版を用いた。

3. 結果

きょうだいに提供した情報の内容, きょうだいが認識した情報の内容, 情報提供時のきょうだいの様子, 情報提供後のきょうだいの変化の自由記述からKJ法を用いてカテ

ゴリーに分類し, 頻度を算出した。その結果, 保護者は「きょうだいの生活に関して」と「患児の病気について」全ての対象者が伝えたと感じていたが, きょうだいは認識している者と認識していない者がいた。

情報提供の方法(時期, 内容)と情報提供時の様子, 情報提供後の変化との関連を検討するため, きょうだいへの情報提供の各内容について, 情報提供時期(診断時期, 入院中以降)と情報提供時の様子, 情報提供後の変化の頻度(有, 無)のクロス表を作成し, Fisherの正確確率検定を行った。その結果, きょうだいの生活の変化, 患児の入院, 親の不在, 病気の概要について, 診断時期に伝えられたきょうだいは, 理解なしの反応を示すことが有意に少なかった(きょうだいの生活の変化: $p=0.01$; 患児の入院: $p=0.01$; 親の不在: $p=0.01$; 病気の概要: $p=0.05$)。治療と副作用について, 診断時期に伝えられたきょうだいは, 情報提供後に情緒的混乱の変化を示すことが有意に多かった($p=0.05$)。予後については, 診断時期に伝えられたきょうだいは, 情報提供後に他者への気遣いの変化を示すことが有意に少なかった($p=0.03$)。

PTSSと関連する情報提供後のきょうだいの変化を検討するため, 情報提供後の変化の頻度(有・無)×PTSS(高・低)のクロス表を作成し, Fisherの正確確率検定を行った。その結果, 情緒的混乱の変化を示したきょうだいにPTSS高群が有意に多かった($P=0.03$)。

4. 考察

情報提供の現状として, 保護者が情報提供したと感じていても, きょうだいが認識していない状況が明らかとなった。情報提供の時期に関しては, きょうだいの生活の変化, 患児の入院, 親の不在, 病気の概要といった伝えやすい情報は診断時期に伝え, 治療と副作用や予後などの情報は, 患児の治療の進行などに合わせて説明していくことがきょうだいのその後の適応にとって望ましい可能性が考えられる。また, 情報提供後にきょうだいが情緒的混乱を示した場合, その後のPTSS得点が高い可能性が示された。このことから, 情報提供後にもきょうだいの様子を親などから医療者が確認し, きょうだいに寂しそうな様子などの情緒的混乱が認められた場合には, 専門家による早期の介入が必要であるといえる。その際に, 情報不足や不安からきょうだいが過度に心配しすぎていないかなど自分の状況をどのように認識しているかを確認し, 情報を再度提供することが有効だと考える。